

アンコール・ワットと祇園精舎

——世界で唯一の「アンコール・ワット絵図面」の 発見とキリシタン弾圧——

石 澤 良 昭

1. 旧アンコール都城はどうなったか？

—16世紀・17世紀のカンボジアと日本—

アンコール王朝は、1431年頃に西隣国シャム（現在のタイ国）の前期アユタヤ軍に攻め込まれ、約600年あまり続いたアンコール都城が落城した。その後、王都はスレイ・サントール、そしてプノンペンへ、さらに1528年にロヴェックへ、1618年にウドーンへ、そして1867年から現在のプノンペンへ遷都され、現在に至っている。

このアンコール旧都城とその付近の寺院・僧院はそのまま密林の中に放置され、この世から忘れ去られてきたとこれまでいわれてきた。ところが1546–76年にかけてアンコール王朝の末裔の王たちが発見し、旧都アンコール・トムに一時復帰しようと試みた。ちょうど同じ頃カンボジアへ来航していた西欧の宣教師たちも、この旧都アンコールの様子を書き残している（Groslier 1997（参照））。日本では豊臣秀吉が全国を統一し（1590年）、関ヶ原の戦い（1600年）を経て徳川家康が1603年徳川幕府を開いた。そうした時代には、キリスト教の布教や貿易活動等で多くの外国人が来航してきた。外国と日本との往来も盛んで、朱印船貿易で現地へ赴く船舶が利用されていた。渡航先は現在の東南アジア全域に広がっており、そこには日本人町がいくつもできていた。当時の日本人はこの東南アジア地域を南天竺と考えていたことが判明している（西川 1708）。

アンコール・ワットの十字型中回廊の壁や柱などには、日本人参詣者の墨書跡が15ヵ所残っている。判読できるこれら落書きの年代は慶長17年（1612年）から寛永9年（1632年）まで20年間のものである。

2. 日本人墨書跡

アンコール・ワットに残された日本人の墨書跡は、全部で15例である（黑板1930、尾高 1939、清水 1965、岩生 1966）。そのうち13例が十字型回廊に見られる。それらの墨書は石柱の平坦な側面に直接筆で書かれている。かつては石柱には朱色塗料が石面に塗られていたと思われるが、墨書はその石表面上に印されている。石柱墨書の位置は床から2～2.5mの高さのところに頭書

が来ている。それらの文章の多くは3～4行の短文であり、名前、出身地、年月日のものが多く、長いまとまった文章は森本右近太夫一房の筆跡2点のみである。他の多くのものは、“日本”、“堺”、“肥後”などのように、日本人であることを述べ、その居住地を明らかにし、墨筆者または同行者の姓名を記している。ただし、これらの事例から判る事実は落書きの程度のものである。

慶長17年（1612年）	7月14日	1例
〃	7月（日不明）	1例
〃	（月日不明）	4例
〃（年月日不明）		1例
寛永9年（1632年）	正月20日	1例
〃	正月20日	（同文か第一回廊内の内庭北経蔵入口に）
〃	10月15日	1例
〃	（月日不明）	1例

の11例が挙げられる。全年代が消え、それを知りえないものは、3例にすぎない。その結果を分析してみると、日本人参詣者が①慶長17年（1612年）7月14日、②寛永9年（1632年）正月20日、③同年10月15日の3回以上にわたって来詣したことは確実である。寛永9年（1632年）の年月不祥のものも、わずかに残る文字から「正月」であることが看破できる。日本人は少なくとも4回は参詣していた。

次に、それらの来航した人々は、いかなるところの出身であったか。肥後の嘉右衛門尉は安原屋の屋号を持っていたというから、商人であった。朱印船による貿易商であったと思われる。

墨書から読み取れる地名として「泉州堺」と「肥前」「肥後」、さらに解読が難しいが「大坂」らしき地名が現れている。渡航者の中では平戸、長崎、肥前の出身者が多く、次に堺および大坂商人の活躍も判明してくる。墨書に彼らの出身地名が残されたものと思われる。新たに1例の発見を加えて墨書の数15例となった。これらの墨書は剥落や消失した箇所もあり、断片的な記録としてしか把握できない。

3. 初冬の北風で出発

朱印船とは、16世紀末から17世紀前半にかけて海外渡航許可の朱印状を携えて交易をした日本の商船のことで、文禄元年（1592年）頃には豊臣秀吉が最初の朱印状を下付した。このように商船に朱印状を与え、貿易を円滑に行わせるやり方は、徳川幕府にも受け継がれ、慶長6年（1601年）より鎖国に至る30余年間に350～360隻の朱印船が東南アジア各地に航行し、活動していた。その船舶は70tから600tまでの大小の船が使われ、初冬の北風により南航し、初夏の南風を利用して帰航した。その渡航先はフィリピンのルソン、カンボジア、シャム、チャンパ、

ジャヴァ、パタニなど19ヵ所以上におよび、各地に大小の日本人町ができ、約7000人の居住者がいた。

アンコール・ワットの石柱に残された日本人の墨書のうちで、紀年の明らかなものは、慶長17年（1612年）と寛永9年（1632年）であるから、朱印船の活動が活発であった時代に当たり、恐らく、墨筆者は朱印船に搭乗した人たちであった。例えば、慶長17年（1612年）度の墨書には“日本堺”と記すものが多く、同地の商人によって送り出された船に乗っていた団体旅行の人ではないかと思われる。松浦藩に仕えた森本右近太夫一房は、寛永8年（1631年）の暮れから9年（1632年）の正月の間にカンボジアに到着したと考えられ、松浦藩の商船に便乗してきた可能性が高い。

朱印船には船の運航に必要な船員の他に、便乗商人というべき客商も少なからず乗り組んでいた。彼らは寄航地において独自に物々交換の小商いを行ったが、船の商品の上げ下ろしには直接関係がないから、次の出航までの間を利用してアンコール・ワット詣に出ることも可能であった。例えば肥後国の安原屋嘉右衛門尉は、これら客商の一人ではなかったか。墨書1号の“同行9人”も、かような人たちが団体旅行団としてアンコール・ワットに來訪したことを示すものかもしれない。

4. 日本人キリシタンの教会があった

ところが、森本右近太夫は父母の作善のために渡航した。渡航者を全て商人と決めることはできない。それらの人々は商人に限らず、武家出身の者も少なくなかった。その頃はちょうど朝鮮征伐や関ヶ原の合戦など戦国の乱世の時代であり、下克上や大名の興亡が激しかった。徳川氏の幕府開設によって立身出世の道がふさがれ、浪人や志を達しえない武士たちがいた。彼らの中には乱世をはかなみこの新天地を目指し運命を賭けた人たちもいた。山田長政はその代表的な事例である。森本右近太夫はやはり戦国の世のはかなさを嘆き、参詣により安寧を願っていたかもしれない。また、日本人の中にはその武術を買われて現地の王侯の警護人になった人や、王の守備隊の指揮官に任ぜられた人もいた（Ishizawa 1998）。

また一方では、しばしば悲惨な弾圧を受けた切支丹の信者たちが安住の地を求め、東南アジアへ避難していた。カンボジアのトンレサップ川河岸にあったピニヤ・ルーの教会は日本人信者の手によって建設されたと伝えられ、彼らが移住日本人の主流をなした時もあった。このような居住を目的とした渡航者であり、さらに滞在期間も長いことから、機会を捉えてアンコール・ワットを訪れることも可能であったであろう。

5. 最近日本で発見された森本右近太夫一房の消息

森本右近太夫がアンコール・ワットを参詣した3年後の寛永12年（1635年）には、鎖国の方

針が打ち出され、渡航禁止と帰国日本人の踏絵が発表された。右近太夫がアンコール・ワット参詣の後帰国したのか、あるいは現地の日本人町に住み着いたのか、今日まで不明であり、その動静について分からなかった。

1993年に右近太夫から数えて14代目の子孫にあたる森本謙三氏（岡山県津山在住）のご努力で菩提寺と右近太夫父子の墓が発見された。そしていくつかの新史実が判明した。その墓は京都市の乗願寺にあり、そこで儀太夫父子の墓碑と位牌が見つかったのであった（石澤 1994、2003、2004）。

①その墓碑には「月窓院光譽道悦居士」

②その位牌には森本儀太夫：慶安4（1654）年6月22日卒

森本左太夫：延宝2（1674）年3月28日卒

③細川藩家臣森本儀十郎が寛永2（1849）年4月25日に墓参り・墓修造

ここにいくつかの問題点がある。①墓碑と墓誌には法名のみ刻み込まれ、森本の名前記載なし。②位牌でなぜ「左太夫」という名前になっているのか。③儀太夫から数えて8代目の森本儀十郎が170年ぶりに上洛し、なぜ合葬して墓を修造したのか。

右近太夫一房は、鎖国令前の慌しい雰囲気の中で帰国した。その当時加藤家は改易（1632年）となっており、肥後（熊本）は細川藩に変わっていた。そして幕府の切支丹弾圧が強化されていく中で、1633年には日本人に対して海外往来禁止令が出され、帰国者には極刑をもって迎えられた。右近太夫は海外渡航歴とそのとき使用した名前を隠す必要があった。その理由は、厳しい鎖国（寛永）条例によって森本家一族に渡航歴の取り調べおよび切支丹の疑いがかかることを恐れたからであった。右近太夫は名前を変え、社会的に身を隠したのであろう。それに加えて森本家の直系の親族が仕える細川家への配慮もあったことは言うまでもない。右近太夫は儀太夫と共に父の生誕の地京都山崎へ移り住んでいたと思われる。当時海外へ渡航した者が、鎖国という国の対外通交政策に対して如何に世間をはばかり、渡航歴を隠さねばならなかったか、この史実の断章からもうかがい知ることができる。

6. 「祇園精舎図」は誰が作成したか？

水戸市にある徳川ミュージアム（旧彰考館）には、「祇園精舎図」と題するアンコール・ワットの平面図が所蔵されている。この絵図面は縦68.45cm、横が75cmの紙に描かれ、建築物を墨で表わし、水には青色、彫像には黄などの色を施した立派な絵図面である。この絵図面は徳川光圀が『大日本史』を編纂の折、収集された。伊東忠太博士は早くからアンコール・ワット説を唱えられた（伊藤 1912）。そもそも祇園精舎とはインド中部の釈尊（Sakya-muni = BC566頃～BC486頃）が修行した僧坊のことである。

いつの時代からかはわからないが、日本人航海者が朱印船貿易以前から、その壮大なアンコー

ル・ワット寺院の噂を聞き及んでいた。早くからメコン川をさかのぼり、海ほどの広さのトンレサップ湖を渡り、そして、川船に乗り密林の中に分け入ったことから、地理的感覚としてアンコール・ワット周辺を南天竺と考えたのであろう。往時の日本人が壮大なアンコール・ワットを祇園精舎と誤り信じていたことも無理からぬところがある。アンコール・ワットを祇園精舎と誤った張本人は、右近太夫や墨書者たちではなく、もっと古い時代に南方へ雄飛した勇敢なる日本人航海者たちのうちに求めるべきであろう。安永元年（1772年）に立原翠軒は現存する「祇園精舎図」とその由来を書いた。そして彰考館に保管したものであろう。

7. 『甲子夜話』とは

『甲子夜話』は平戸の松浦藩主松浦静山の随筆集である。この随筆集は文政4年（1821年）11月甲子の夜に筆を起し、天保12年（1841年）6月に死去するまでの、20年間にわたって書き綴られたものである。その『甲子夜話』正篇巻21に次のような1節がある（松浦 1910）。

「清正の臣森本義太夫の子を宇右衛門と称す。義太夫浪人の後宇右は吾天祥公の時お伽に出て咄など聞かれしとなり此人嘗て明国に渡り夫より天竺に住たるに彼国の堺なる流砂川をわたるとき大魚を見たるが、殊に大にして数尺に及びたりと云夫より檀特山に登り祇園精舎をも覽てこの伽藍のさまは自ら図記して携還れり。今子孫吾中にあり正しくこれを伝ふ然ども今は模写なり。」

「祇園精舎図」の存在が記録されたわけである。『甲子夜話』にいう森本義太夫の子宇右衛門が、右近太夫一房と同一人である。

甲子夜話は割註としてではあるが、「今その子孫吾中にあり正しくこれを云ふ然ども今は模写なり」と記し、必ずしも原図ではないかもしれないが、模写絵図はたしかに松浦家中に残されていたことが推察される。

8. 祇園精舎絵図の制作者島野兼了は偽名ではないか

一方、「祇園精舎図」の裏側にはこの絵図面の由来が書いてある。概略すれば、藤原忠寄の祖父忠義が、正徳5年（1715年）長崎において、ある男が所蔵していた絵図から転写したものであると明記している。そしてその絵図面は年号の明示はないが、大通辞島野兼了が天竺の祇園精舎に渡航し、そこで模写した絵図面であると述べている。この1630年代は鎖国政策がようやく具体化された時に当たり、果たして渡航ができたかどうか疑問である。右近太夫一房が墨書を残したのは1632年であり、それより遅い場合はどうであろうか。ここに島野兼了は本当に天竺へ行ったかどうか、この渡航の事実には数々の疑問が残る。もしかして松浦家に仕える森本家の子孫のうちの誰かにあたるのであろうか。

『甲子夜話』は、いくつかの興味ある問題を示唆している。第一に、一房が参詣して宿願を果

たしたうえ帰国し、松浦家に引き続き仕えていたこともこの『甲子夜話』から明らかである。第二に、島野兼了なる人物が、果たしてその頃大通辞として長崎にいたかどうか、諸史料を考察したがどこにもその名前は出てこない。第三に、「祇園精舎図」の右下には、注記として「ここより檀時山（祇園精舎＝アンコール・ワット）への道」と記載されている。『甲子夜話』には宇右衛門が「これより檀時山に登り、祇園精舎を見た」という類似した記載があることを指摘したい。絵図面の裏書にはこの記載がない。最近の研究の結果、一房の没年（1674年）が判明し、『甲子夜話』は信用できる記録であり、多くの場合もその裏付けが取れた史実が記載されている。さらに絵図面の右下注記と裏書の比較検討を加えてみるならば、藤原忠義、藤原忠寄の両名の存在も怪しいとなれば、そこに掲げた島野兼了はどうも実在の人物ではなく偽名の疑いが強い。

9. 森本家の新史料の発見と問題点

岡山市在住の末裔森本謙三氏が当時の菩提寺を発見され、墓碑などで確認された。

新しい史実の発見や新考察結果が提示された。

①京都乗願寺から右近太夫の没年（1674年）と同父義太夫の没年（1651年）が新発見され、これまで知らなかった史実がいくつか明らかとなった。

②なぜ京都乗願寺墓碑の俗名森本姓を消したのか？通常では俗名は必ず記されている。乗願寺の位牌に記された「森本佐太夫」は「森本右近太夫一房」と同一人物か？

③『熊本森本家法名帖』に記された「右京之助一為（一俊）」＝「佐太夫」と「右近太夫」というように、同一人物の証明は可能か？

④『細川家侍帖』の中で「曾祖父右近太夫」名が海外渡航の嫌疑がかかることを恐れ意図的に抹消されている。

⑤細川家家臣森本儀十郎がなぜ1849年に上洛し、「義太夫」と「佐太夫」の墓をつくりなおし合葬したのか？

⑥『甲子夜話』は宇右衛門（右近太夫）がアンコール・ワット参詣を果たし、引き続き松浦藩に仕えていたという史実から「祇園精舎図」の制作は右近太夫ではないか？

⑦裏書は藤原忠義と藤原忠寄の両名が書いたが、両名とも出自がよくわからず、そこに記載されている大通辞島野兼了も出自が不明。どうも偽名ではないか？それでは誰の偽名か。

⑧「祇園精舎図」の表の右下箇所の記述と『甲子夜話』と同じ記述があるが、それは何を意味しているか？『甲子夜話』にでてくる宇右衛門と関係が濃くなってくる。

以上、右近太夫はアンコール・ワットへ参詣したが故に、様々な事件に遭遇した。その事件の内容が上記8項目の史料に反映されている。

10. 結論として

右近太夫は鎖国令の厳重な取締まりの中で海外渡航歴を隠す必要があった。右近太夫自身が帰国後、踏み絵などの社会的制裁を受ける可能性があった。これに伴い、松浦藩に仕えていた右近太夫の一族および熊本において仕官している森本家一族やその仕官先の細川家などに迷惑がかかる恐れがあった。そのために右近太夫は改名したうえで、俗名なしのまま埋葬された。子孫たちはこの実在した人物を系譜上から抹消し、墓碑に森本姓を刻まない処置をした。そして、海外渡航歴を隠蔽した。それにもかかわらず、1820年頃の『甲子夜話』にはアンコール・ワットへの渡航の事実が記載された。森本家の子孫は1849年墓と位牌（改名のまま）を作り直した。この2史料は約200年あまりの年月が過ぎ去っており、すでに時効と考えたのだろうか。「祇園精舎図」の制作者は、島野兼了が偽名であるとしたら右近太夫ではないか？

いずれにせよアンコール・ワットに残された日本人墨書から16世紀の日本とカンボジアの間の商業活動と頻繁な往来が判明した。日本人墨書は何を伝えたかったのか、それでも当時カンボジア地方を祇園精舎の国インドと思い込んでいた。参詣により信仰の安寧を得ていたのであろう。

【参考文献】

- Groslier, B.P.: *Angkor et le Cambodge au XVI^e siècle, d'après les sources Portugaises et Espagnoles*, PUF, Paris, 1958 (『西欧が見たアンコールー水利都市アンコールの繁栄と没落』石澤良昭・中島節子共訳、連合出版、1997)
- Ishizawa, Y.: *Les Quantiens Japonais dans l'Asie du Sud-Est au XVII^e siècle, Guerre et Paix en Asie du Sud-Est*, par Nguyen The Anh eds., L'Harmattan, Paris, 1998, pp.66-75
- Peri, Noël: *Essai sur les Relations du Japon et l'Indochine, aux XVII^e siècles*, BEFEO tome XXIII, Paris, 1923, pp.119-126
- 石澤良昭「落書きと歴史ー17世紀にアンコール・ワットを参詣した日本人」『文化庁月報』No.309、1994
- 石澤良昭「1932年にアンコール・ワットを訪れた森本右近太夫一房の消息」『三笠宮殿下米寿記念論集』三笠宮殿下米寿記念論集刊行会、2003
- 石澤良昭「17世紀にアンコール・ワットを参詣した日本人」(『季刊文化遺産ー特集アンコール文明を科学するー』(財)島根県並河萬里記念財団、2004)
- 伊藤忠太「祇園精舎図とアンコール・ワット」『建築雑誌』第313号、1912
- 岩生成一『南洋日本人町の研究』岩波書店、東京、1966、pp.115-121
- 尾高鮮之助『印度日記ー仏教美術の源流を訪ねてー』刀江書院、1939、pp.74-103
- キン・ソック『カンボジア近世史ーカンボジア・シャム・ベトナム民族関係史 (1775-1860)』石澤良昭訳、めこん、2019
- 黑板勝美「アンコール・ワットの石柱記文について」『史学雑誌』第41-48号、1930
- 清水潤三「アンコール・ワット石柱に残る日本人墨書の調査」『インドシナ研究ー東南アジア稲作民族文化総合

調査報告(1)一』（松本信広編）有隣堂出版、横浜、1965、pp.221-265

中尾芳治「アンコール・ワットに墨書を残した森本右近太夫一房の父・森本儀太夫の墓をめぐって」『京都府埋蔵文化財論集 第6集 - 創立三十周年記念誌 -』京都府埋蔵文化財調査研究センター、2010、pp.397-410
西川如見『増補華夷通商考』1708

松浦静山『甲子夜話』（1821-1841）国書刊行会、東京、1910

本稿は、令和元年6月26日に立正大学品川キャンパス石橋湛山記念講堂で開催された立正大学法華経文化研究所公開研究例会（共催：立正大学仏教学部）の講演資料に基づき、加筆校正したものである。